造営されたもので、伊勢内外宮を分霊し、その地を伊勢堂山と称した。仏堂は文珠堂1宇、藩士の嶺家が仮堂を建ててまつったものを5代藩主吉村が修覆料知行を与えて修造させたもの。嶺家は在郷除屋敷〔屋敷は畑地扱いで年貢が課されたが、除（じょ）とは免除のこと〕1軒を鷲巣山に与えられていたが、その屋敷内を最上〔山形〕への街道が通っていた（安永風土記）。道は奥州街道、羽州最上への街道、黒川郡へ通じる道の3筋があり、景勝の地としては仙台七崎のうちの鴉崎（文殊堂下）、田歌崎（東照宮と万寿寺の間）があった（封内風土記）。田歌崎は玉手崎ともいった。〔下略〕』

明治22年、荒巻村の内、字山上清水・滝前・宮裏・上郡山・中ノ澤部落を仙台市に分割編入した後、上谷刈村・古内村・野村・七北田村・市名坂・松森村・北根本と共に七北田村となった。昭和6年4月1日、旧北根村と共に仙台市に編入された。

注(9)　利府本郷・塩釜村・田子村、燕沢村・小鶴村・森郷・神谷沢村・岩切村・岡田村・沢乙村・南宮村・中野村・大代村・菅谷村・山王村・留谷村・飯土井村・下馬村・高崎村・浮島村・新田村・加瀬村・田中村〔東田中村〕・高橋村・笠神村・春日村・蒲生村・福室村・八島村・市川村・桂島・石浜。

注(10)　p.588の注(8)参照。

注(11)　p. 23の注(1)参照。

注(12)　高城本郷・桜渡戸村・竹谷村・赤沼村・松島村・根廻村・手樽村・小泉村〔北小泉村〕・初原村・幡谷村・磯崎村・寒風沢・野々島。

注(13)　p.588の注(10)参照。

注(14)　p.250の注(16)参照。

資料　宮城県史2

宮城県史3

86. 「山家横丁」〔やんべよこちょう〕とは何処か

問　東京の山家という友人から、仙台の「山家横丁」は何処か、先祖の出た所なので調べてほしいと依頼してきました。「山家横丁」とは何処のことですか。地元の人に聞いてもわかりませんので。

答　戦前まで、東二番丁(1)から西へ、東一番丁(2)と直交し、これを貫いて国分町(3)に至り、食い違いで立町に通ずる細道があって、これを立町通といっていました。この立町通の西半分、即ち東一番町と国分町間を「山家横丁」と俗称していたのでした。これは、東一番町が立町通と直交する西北角に、山家豊

三郎の旧武家屋敷があったので、この名が生れたのです。それというのも、山家豊三郎は、明治維新[4]後寂れ果てた旧侍丁の東一番丁を、市内随一の繁華な商店街に発展させる基礎を築いた一大功労者であったので、人々の「山家」の名に感謝し、賞揚する率直な気持から出たものでもありました。また、その邸内に祀ってあった「山家明神また和霊神社[5]」が、衆人の信仰を集めていたことにもよるといえます。

「東一番丁物語」（柴田量平）に、次のような記事があります。

『山家横丁とは玉沢横丁の別名でもある。猶詳しく言ふならば、玉沢横丁の中央現在の桜湯〔今はなし〕の所から東一番丁までの区間を云ふのであって、其処ら、北側一帯が山家屋敷であった為めに其の名が生れたのであるが、東一番丁の文化と繁華の種は、最初この山家横丁に播〔まき〕下され、それが中心となって東一番丁南北へ進展したのである。

元来、東一番丁は〔略〕武士の住宅屋敷地である。杉の生籬〔いけがき〕や、土塀で繞〔めぐ〕らしてゐる広大な邸宅の深奥から、時折琴の空音位が洩れ聞える位の静寂な此辺が、莫逆〔「まさか」の当て字〕今日の繁華を招き、仙台市の中心地にならうとは何人も夢想だにしなかった。それが明治に入り一転して、今の繁華街に発展したのであるから全く文字通り駭目〔がいもく〕に値するといはざるを得ない。

此の急激な発展の原因は、仙台の中心地でもあり、国分町、芭蕉の辻、大町四、五丁目の近隣でも有りして、充分地形上から言っても其の素地があったらうが、山家豊三郎の先覚と開発の努力に拠るものだと古老は言って居る。

明治維新＝それは凡ゆるものを一瞬に暗転させた。従来、大藩士で候と大きな顔をして居た飽衣暖食の東一番丁の士族連は一たまりも無かったのである。如何にして明治黎明を迎へるか等と云ふ考へ工風などあらう筈がない、持てる者は早々と屋敷や建物、家財を売り払ひなどして纔〔わずか〕に生活の途を見つけねばならなかった。かくして士族連は長年住み慣れた土地を後に、或は地方に、或は市街の片隅にと逃れる様にして散って行くのであった。

山家豊三郎は、伊達家にしては由緒のある重臣であり、而も砲術指南役と云ふ重い職責を担って居たが、根が明敏で、時勢には通暁して居た。彼は其時東一番丁を如何なる町に開発させ、又職を失ふた士族に如何なる生活を与へようかを苦心して、幾度か東京、京都、大坂〔この頃「大阪」という表記はしない〕方面に出向き、具に視察研鑽した結果、東一番丁は矢張り商店街に生くる事が最良策であるとの信念を得て、茲に東一番丁の方向が決定されたと云ふ。

彼は、その手始めとして自分屋敷の、山家横丁に面した部分を劃して、小店舗十数戸を建築し、商売希望者に之れを貸与した。其の時分の山家横丁は、国分町南角に玉沢伝蔵商店はあったが、東一番丁に面した両角は山家、田村両邸の陰欝な大建物があるだけで、其間、両側には茅、蓬〔よもぎ〕などが茫々と生ひ茂って居る通路に過ぎなかったから借り手の希望者などあらう筈がない。

そこで彼は新築の店舗に、先づ彼の随臣であった近藤文吉に煙草刻みを習得させ煙草屋を開業させた。

之れが商店の誘導となって様々な商売が此処に出来たのである。彼は、それらの商店を熱心に指導することを怠らなかった。例えば大資本と古い暖簾〔のれん〕とを以って居る直ぐ脊中合せの国分町の老舗や大町の大商店の間に挾まって、殆ど裸一貫に等しい、小資本で以て何んな営業が適当であるかなどは、東京や京坂での見聞を基として教へたのであるが、其頃は何人も考へつかぬのであった。凭〔こ〕うして、仙台市に全く新奇な商店が次から次へと生れて行ったのである。

彼はまた、夜の殷賑〔いんしん〕を起図して夜店を開始めた。場所は山家横丁を中心として東一番丁面の一部であったが、最初は其那〔そんな〕寂しい場所に何程勧誘しても商人は出て来る筈がないので、彼は毎夜、其商人等に燈火代と握飯とを供給して出店を奨励した。同時に、同邸内に祀ってある山家明神事和霊神社を開放して、一般人に参詣の便を与へ、時々盛んな同社の祭礼を催したりしたので此の界隈が次第に賑はって繁昌して来た。又それにつれて近所には寄席〔よせ〕、浴場、劇場、割烹〔かっぽう〕店、芸妓屋等が出来て、東一番丁は繁華街、盛り場の形態が備わったのであったが、其の発祥の根元は実に山家横丁であった。』

「仙台あちらこちら」（佐々　久）にも、

『明治初年山家豊三郎の開拓によって山家横丁、玉沢横丁の付近が商店街になると人の集まる所は次第に人を呼び、寄席、そばや、床屋、料理屋、鳥料理、牛肉屋、風呂屋などが店を出し夜店もはじまった。』とあります。

やがて、明治16年８月山家豊三郎は更に東一番丁発展のため、屋敷の全部を商店敷地として提供し、東二番丁、立町通西南角に移転しました。それ以来、山家屋敷のなくなった山家横丁を、自然誰言うとなく山家横丁南側西端角にあった菓子店玉澤の名をとって、「玉沢横丁」と呼ぶことが多くなりました。これについて、「東一番丁物語」（柴田量平）に、『山家横丁の名は、山家一家と同邸内に祀ってあった和霊神社が、現在の東二番丁へ移ってからは、山家横丁の名を呼ぶ者が次第に尠〔すくな〕くなり、大正の初年頃になると其処ら界隈の者以外からは全く忘れ去られてしまった。』とあります。

この「山家横丁」と称せられた細道は、戦後、立町・立町通と一線となって30ｍに拡幅され、更に東へ仙台駅前通まで貫通した「広瀬通」に入ってしまいました。

注(1)　p.415の注(2)参照。

注(2)　p.414の注(8)、注(9)を参照。

注(3)　p.414の注(6)参照。

注(4)　「仙台人名大辞書」に、

『公益家。諱は頼道、通称豊三郎、清奇園と号す、幼にして祖父市十郎に従ひ、外記流の砲術を学び又松木某の門に入りて荻野流の大砲術を修め、尽く奥秘を極む、安政四年〔1857〕藩蝦夷地を警備するに当り、其大砲頭となりて白老に屯す、万延元年〔1860〕江戸番馬上となり、文久三年〔1863〕更に武頭に遷る、明治戊辰後藩士其常禄を失ふ、豊三郎卒先して其邸地を劃し、居家数十戸を建築し、巷路を通じて之を賃貸す、呼んで山家横町と云ふ、

明治五年戸塚貞輔商店を石巻に開くや、其嘱託を受けて店務を掌理す、七年仙台に公園〔西公園〕を開くに際し、其幹事となり、九年聖駕〔明治天皇〕東巡の時庁命を受け、塩釜及び松島の行在所を経営し、大に其職に称〔かな〕ふ、官其労を賞して絹帛〔けんぱく〕数種を賜ふ、既に老いて漸く世事に倦む、乃ち別邸を清水小路に営み、是を清奇園〔近年まで、日赤仙台病院の構内に残っていた。〕と名づけ、山を築き池を穿ち花木を植え、以て之に配す、世称して東京以北の名園となす、西岡宜軒、朽木松軒、遠藤随所、茂庭竹泉、丹野樊山〔はんざん〕等、一時の名流と交懽〔こうかん〕す、明治二十九年十一月五日歿す、享年六十五仙台荒町仏眼寺に葬る。』とある。

注(5)　「仙台の社寺と教会」（山本　晃。「仙台市史」第7巻の内）に、

『和霊神社　立町通東二番丁西南角、旧山家公頼屋敷〔誤り〕内に鎮座していたが、昭和二十年の戦災で焼失以後再興に至らない。祭神山家清兵衛公頼〔きんより〕。慶長十九年〔1614〕伊達政宗の庶子秀宗、伊予国宇和島に封ぜらるるや、陪従して彼地に至り後国老となり忠讜〔ちゅうとう。讜は正しい言葉。〕を以て秀宗を諫め、終に寃死〔えんし。寃は無実。〕するに至ったが、その後寃魂屢々現われて諫諍〔かんそう。いさめあらそう〕の状を示し、奸魁〔かんかい。悪の張本人〕亡び、秀宗亦悟るところあり、公頼の霊を城外に祀って和霊明神と称し、吉田家に託し卜部神祇権大輔により正一位和霊大明神の神号勅宣を得たが、明治の中期〔？〕十四代山家豊三郎に依って仙台の旧〔　？　〕屋敷内にその分霊を祀ったものという。因に公頼が暗殺されたのは万治元年（一六五八）〔誤り。実は元和6年（1620）6月29日歿。「貞山公治家記録」巻之28にも、元和6年この事の記事がある。〕六月二十九日で、毎年八月九日〔太陽暦〕に祭典を行っていたが、戦後中絶、昭和二十七年八月、七年振りでその祭典が行われた。』とある。

和霊神社は、昭和49年山家氏の移転と共に台の原5丁目に移り、またその分神がジャスコ東一番丁店の屋上に祀られ、祭典は7月商店街夏祭の一つとして行われている。

資料　東一番丁物語（柴田量平）

仙台あちらこちら（佐々　久）

仙台地名考（菊地勝之助）

87.　山家公頼〔やんべきんより〕の歿年はいつか

問　和霊神社として祀られている山家公頼の歿年はいつか、本によってまちまちです。